SHOKEI

B日程

二〇二〇年度
尚絅学院高等学校
入学試験問題

国語

試験時間（五〇分）

注意事項

一. 「始め」の合図があるまで問題の表紙を開かないでください。
二. 解答用紙には決められた欄に受験番号のみ記入し、氏名は書かないでください。
三. 解答は必ず解答用紙のそれぞれ決められた欄に記入してください。
四. 印刷が見えにくい場合は、手をあげて監督者の指示に従ってください。
五. 考査が終わったら、解答用紙と問題用紙を別々にしておいてください。
六. その他すべて、監督者の指示に従ってください。

受験番号	

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「俺」は、キリスト教の学校で礼拝のオルガンを弾くオルガン部に所属する、高校三年生である。

九月、学校が始まる。月末の文化祭なんて、あっという間にやってくる。倉田コーチは、できる限りの時間を割いて、オルガン部の指導をしてくれていた。放課後の部活の時、自分の練習だけでなく、他の人のレッスンにもできれば参加するようにと言われた。何か参考になったり、刺激になったりするし、部というまとまりが感じられるだろうと。単純な好奇心から、俺は全員のレッスンを見学した。だいたい、予想通りだ。一番練習が足りてないくせにヘラヘラしているのが北沢で、本番のプレッシャーにつぶれそうになりながら必死で頑張っているのが渡辺で、一番危なげなく堅実に仕上げていっているのが青木で、まだ、ミスタッチがかなりありながらも、後半の足鍵盤でワタワタしながらも、演奏そのものが非凡な天野。

俺のレッスンの時には、全部員が集まりやがった。そして、俺が弾くのを聴いて、コーチを始め、うんざりするくらい誉めそやされた。自分が真っ二つに裂けるような気がした。誉められて嬉しい自分。同時に、違うだろう、こんなメシアン[*1]ではダメだろうとおぞけをふるっている自分。

A「おまえ、ちゃんとしたレコードで、この曲、聴いたこと、あるのか？」

俺は思わず、天野に食ってかかった。天野は「はい」と素直にうなずいた。

「こんなんで、本当に弾けてると思うのか？」

みんな、驚いて、俺と天野を見ていた。俺がすごい剣幕で、そんなことを後輩の天野に詰問するのは、とても変だ。普通なら、倉田コーチに、せめて、同じ学年の渡辺に聞くべきことだ。

ただ、俺は天野にわかってほしかった。何かを否定してほしかった。誉めないでほしかった。天野なら、そんな耳を、そんな心を持っていると思った。

天野は、いつもの飾り気のない表情で、まっすぐに俺を見つめた。茶がかった透明な大きな瞳は、静かで揺らがなかった。彼女自身は、変なことを恐い声で聞かれても驚いていないようだった。

「もっと違ったふうに弾きたいんですか？」

B天野は、率直に、質問に質問で返してきた。

俺はしばしぶうなずいた。そうだよ。もっと、違ったふうに弾きたいんだ。

「私には、わからないですけど、鳴海さんがそう思うなら、もっと、鳴海さんの音を……」

天野はぼそぼそとつぶやいて言葉を切った。

俺の音を。

「鳴海さんの弾きたいように、鳴海さんの……鳴海さんのメシアンを。もっと……」

すみません、うまく言えません、と天野は頭を下げた。泣きそうな顔になっていた。

「そう、そうなんですよね」

急に、青木が叫んだ。

「あ、先輩の演奏はすごいと思いますよ。先輩がなんて言おうと、誰がなんて言おうと、高校生があんなの弾けやしませんよ。すごすぎです。でもね、私は……あ、自分の話ですみません。私は、なんかね、ただ弾いてるだけで、自分の演奏って感じがしなくて。そんな、自分のメンデルスゾーン[*3]なんて、どこにあるんだろうって。そんなの、見つけられるものなんですか？」

C天野を助けるというよりは、自分の頭に引っ掛かったことを口にした感じだ。

「私ら、まだ、そんな段階じゃないんじゃないかな」

と渡辺が首をひねりながら発言した。

「自分の……とかさ。鳴海くんは別よ。彼は別格だからね。そういう追求の段階なんだろうけど。青木もね、ちゃんと弾けてるんだから、その上を求めていくのかもしれないけど。私なんか、譜面通りに弾くのが、せいいっぱいで、それすら、むずかしいのに」

「ねえ？　最後までつっかえずに弾けるなんて、すごいですよね？」

北沢が［　X　］言うと、渡辺に頭を小突かれた。

「あんたね、あんな有名な曲、結婚行進曲なんて、とちったら、丸わかりなんだからね。私らの曲は、そんなにわかんないよ、間違えても。あんたはね、丸わかり！」

ひえーと頭を抱える北沢をみんなで笑った。

「一人ひとり、性格も技術も違うから、曲を完成させるにあたって、目指すところは、みんな違ってくると思うのよ」

倉田コーチは、いつものおっとりした声で、真剣に語った。

「間違えずに弾く、譜面通りに最後まで弾く、これも、とても大変で大切なことです。それでね、その先のこと、曲の自分なりの解釈と表現ね。曲を自分のものにしていくという過程は、本当にむずかしいことだよね。私もできるだけアドバイスするけど、自分で考えないと意味がないことだから。ね、みんな、がんばって！」

ハイッと元気のいい返事がいくつも飛んだ。俺は何も言わなかった。

「鳴海さんのメシアンを……」天野の声が、頭の中を何度もぐるぐるまわっている。「もっと、鳴海さんの音を……」「もっと」「もっと」「鳴海さんのメシアン」

俺のメシアン？　俺の音？　もっと？　「ただ弾いてるだけで、自分の演奏って感じがしなくて」青木の声も甦る。「曲を自分のものにしていくという過程は、本当にむずかしいことだよね」倉田コーチもしゃべっている。

結局、よくわからない。そもそも、〝俺のメシアン〟なんてものを弾きたいのかどうかすら。ただ、今の状態には納得できない。我慢できない。何度も何度も弾いていけば、何かが見えてくるのだろうか。

学校から駅への途中、国道をまたぐ大きな歩道橋がある。六車線を車がバンバン行き交い、脇の歩道を人がぐんぐん行き交い、歩道橋にも人がどかどか通っていく。うるさい場所だ。

別に、この歩道橋を通らなくても駅には行けるのだけど、車も人も何もかもが、ワンサイズ縮んだ見知らぬオモチャのように見える、D この半端な高みに時々上りたくなる。車の排気音やクラクション、人の話し声や笑い声を聞き、排気ガスと飲食店の油や調理やゴミの匂いを嗅ぎ、通行人が揺らす歩道橋の振動に身を任せる。町中のなまなましい活動が五感を刺激する。それなのに、ここから見えるものは、なぜか、意味のない、生命のない、無機質な景色だ。俺には関係がないと思えるのだ。そして、この世のいっさいが俺に関係ない気もしてくる。妙に安心する。白々と安心する。乾いている。砂のような感触だ。何もかもが。さらさらさらさらと。

なぜだろう。こんなにうるさいのに。

まるで、E 指揮者のいないオーケストラ。いや、もっと無茶苦茶な、てんでばらばらな。ただ、それぞれ勝手に音を出しているみたいな。

（佐藤多佳子「聖夜」による）

【注】

＊1…フランスの作曲家。一九〇八年～一九九二年。

＊2…恐ろしさに身ぶるいをしている。

＊3…ドイツの作曲家。一八〇九年～一八四七年。

問一　A「おまえ、ちゃんとしたレコードで、この曲、聴いたこと、あるのか？」とあるが、このように言ったときの「俺」の説明として最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

1　いくら天野に才能があるとはいえ、自分が魂を込めて弾いた演奏を簡単に批判しないでほしいと思っている。

2　うまくいっていないと自分が感じている演奏を、才能のある天野には安易に褒めてほしくないと思っている。

3　不満の残る自分の演奏に対して、プロの録音を聴いたことのある天野の話は貴重な参考になると思っている。

4　よい演奏だったか疑問があるものの、少なくとも自分は天野よりも才能があることを示したいと思っている。

問二　B「俺はしぶしぶうなずいた」とあるが、このときの「俺」の説明として最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

1　自分の心を天野に見透かされていることに少し驚きを覚えつつも、無視はできないのでひとまず肯定しておこうとしている。

2　天野の言葉はほとんど的を射ていないが、懸命に自分のことを思ってくれたのは嬉しく、それなりに尊重しようとしている。

3　自分が言ってほしかった言葉を、思いがけずすんなり天野が言ってくれたことに拍子抜けしつつも、穏やかに安堵している。

4　不満は残るものの、自分の感じていることを少しでも天野がくんでくれたことがわかり、それなりに納得しようとしている。

問三 C「天野を助ける」とあるが、このとき、天野はどのような状況にあるか、最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

1 「俺」の話に真剣に答えようとしたつもりだったが、結局は自分が批判されたのだと感じて悲しくなっている。
2 自分が以前から抱えていた演奏の悩みと、「俺」の問いかけたことが一致することがわかり、がく然としている。
3 演奏の本質にかかわる問いの重さと、それを問いかける「俺」の激しい勢いに気おされて、胸苦しくなっている。
4 芸術家肌の「俺」の感情的で到底理解しがたい自己主張と、激しすぎる剣幕にうろたえ、気力を失いかけている。

問四 空欄 X に入る言葉として最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

1 皮肉っぽく
2 挑発っぽく
3 冗談っぽく
4 自虐っぽく

問五 D「この半端な高みに時々上りたくなる」について次の(1)、(2)の各問いに答えなさい。

(1) 「半端な高み」は、ここではどのような場所を表しているか、最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

1 何もかもが小さく見えたり大きく見えたり、スケールがどっちつかずになる場所。
2 人や車が自分から近くも遠くもなく、町が少しだけ小さいスケールで見える場所。
3 全てが限りなく静かに小さいスケールで見える、普段の世界とは隔絶された場所。
4 自分も含め何もかもが、ワンサイズ縮んだ見知らぬオモチャのように見える場所。

(2) なぜ「上りたくなる」のか、「五感」という言葉を使い、六十字以内で説明しなさい。

問六 E「指揮者のいないオーケストラ」とは、どのような状態か、最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

1 はからずも秩序が壊れ、それぞれが目的をなくして無謀にふるまっている状態。
2 全体を整えようともせず、お互い敵対し合いつつも衝突はまぬがれている状態。
3 まとまりはないが、それぞれが自らの良いところを生かして共存している状態。
4 調和を求めることもなく、めいめいがありありと気ままにふるまっている状態。

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

右肩上がりのとくに急な時代に生まれ育った「団塊」[*1]とその後に続くひとたちが、いま社会の上辺を占めているのだが、この世代はひょっとして、未来世代を憂うことのもっとも少ない世代なのではないかと、最近つくづくおもう。

高度成長の時代に青少年期を過ごした世代には、どんな深刻な問題も技術の進歩によって次の時代には解決されるという感覚が骨の髄まで染み込んでいる。明日はきっともっとよくなるという時代感覚に酔いしれ、この好況の多くが他国の「悲劇」に負うことは、とんと意識に上らなかった。第二次世界大戦の終焉のあとの時代を「戦後」として意識するのは、アジアでも日本くらいのものであろう。日本以外のアジアの国々では「戦後」もずっと戦争はいろんなかたちで続いてきたし、最近までその渦中にあった国、いまも渦中にある国もある。

他国の「悲劇」とともに意識から外れたもう一つのこと、それが［X］の運命だ。

たとえば江戸期のような低収入の定常社会[*2]に生まれ育ったひとたちは、ひとたび大災害や戦乱が起これば食べてゆけなくなると思い知っていた。だから、孫の世代、ひ孫の世代が餓えないよう、日頃から何かにつけ未来に備えておくのがあたりまえだった。そう、その頃の日本人はいまよりはるかに心配性だった。京都の商家では最近までずっと「儲けられるときに儲けすぎたらあきまへんえ」と言い継がれてきたと聞いたことがある。儲けすぎればかえって商売の手を拡げ、将来もちこたえられなくなるというのだ。具体的にいえば、需要がぐっと増えればそれをチャンスと設備投資をする。景気のよいときには、溜め込んだ財産を元手に業域を拡げる。はたまた株や不動産など投機的な資産運用に走る。そして気がつけば母屋まで借金の形に。それらを戒めた家訓である。じっさい、この家訓をかたくなに守った古い商家は、バブル崩壊も、かろうじてというかしたたかにというか、無事に潜り抜けた。

このような心ばせに対し、ずっと右肩上がりの景色のなかで育ってきた世代は、難題に直面しても次の世代が何とかするだろうと思い込む。国の債務が法外に増え続けても、それを未来世代につけ回しして平気でいる。それを放置できるのは、いまじぶんたちなりに精一杯がんばっておけば、いずれ次の世代が［Y］だろうという感覚があるからだ。

おなじように、そのひとたちは次の世代が経済を回すための需要を「経済成長」の名で先食い[*3]しようとしている。景気を上向きにするために思いつくかぎりの策を打つというのは、たしかに当然のことである。そのなかにはもちろん、大規模な公共事業も含まれる。だが、公共事業は必要に応じてというよりも、経済活性化の手段として企てられる面が強い。となれば、未来の世代がいざ経済状況が逼迫したときに、それを抜け出るための手がかりとして、その世代のために残しておかねばならないのに、それを現世代がじぶんたちの困窮を打開するために先食いするというのは、現世代のエゴでしかない。

［Ⅰ］、おなじ世代は自然を修復不能なまでに壊したまま次世代に手渡そうとしている。原発の再稼働に議会がさしたる抵抗もなく動きだしているのも、これと無関係でない。それどころか、現在の技術ではコントロール不能であることが発覚したその原発システムをこともあろうに他の国に輸出しようとさえしている。そしていま、「防衛」と称して他国に武力攻撃を仕掛ける可能性を担保しようと、それこそが「防衛」を損なう最大の要因であることも顧みずに、さまざまの画策をはじめている。

とどのつまり、未来世代の暮らしにあまりに[*4]鞏固でネガティブな枠をはめてしまったという事実に、心底、[*5]呻吟しているようには見えないのだ。現時点で思いつくありとあらゆる方策を講じておけば、あとは続く世代が何とかするだろう、という感覚である。そして懸案の問題も解決を［Z］。あの石工[*6]の矜持などすっかり忘れはてて。

ひとは生きるうえで、調子というかベクトルというのをひどく気にする。収入が上昇曲線を描くようになると、銀行通帳のちょっとした目減りにも不安はつのる。幸不幸のまだら模様に飽き足らず、人生を幸福一色に染めようと力めば力むほど、不安の種も増えてくる。「成長」という強迫観念に囚われたひとたちもこれとおなじで、「縮小」や「減益」の気配に怯える。この怯えを、このひとたちはこの社会の未来を案じるからだと言う。

［Ⅱ］、ほんとうにそうなのか。

「成長」の予感が安心をもたらす社会、「縮小」へとなかなかに反転できない社会というのは、じつは未来をあなどる社会ではないのだろうか。それが言い過ぎだとしても、未来のほうからじぶんが現在立っている位置を見つめることが苦手な社会ではないか。社会が人口減少に向かうなか、まず脱ぎ棄てなければならないのは、どうもこの頑迷な感覚のようにおもえてならない。

「右肩上がり」[*7]の世代がいま、定年を迎え、さらに不況のただなかにあって、生き方のダウンサイジングに直面している。ダウンサイジングはだから、「成長神話」や「生産主義」に骨の髄まで染められてきた世代にとっては、［Ⅲ］、つねに「改革」や「刷新」をしていないと社会はだめになると前のめりで思い込んできた世代にとっては、逆説的にもむしろ救いなのかもしれない。前へ前へとつねにじぶんを駆ってきた世代が、職から下り、「前進」や「邁進」とは別の生き方を模索せざるをえなくなったとき、「右肩上がり」を知らない世代に感覚的に合流するということも、これからは大いにありうるのではないかという思いさえする。

（鷲田清一「しんがりの思想　反リーダーシップ論」による）

【注】

＊1…第二次世界大戦直後のベビーブーム時に生まれた世代のこと。
＊2…一定して変わらない社会。
＊3…まだその時期でないのに手をつけること。
＊4…強くかたいこと。
＊5…苦しみうなること。
＊6…この本の別の部分にあるエピソードによる。〝目先の評判や利害を超えて、未来の世代に対して恥ずかしくない仕事をしたい〟という、ある石工のプライド。
＊7…小型化すること。規模を縮小すること。

問一　空欄 X に入る言葉として最も適切なものを、これより前の文章中から五字以内で抜き出して書きなさい。

問二　空欄 Y 、 Z に入る言葉として最も適当なものを、次の選択肢からそれぞれ選び記号で答えなさい。

Y　1　増やしてくれる　　2　どうにかする
　　3　楽をできる　　4　もちこたえる

Z　1　にわかに急がせる　　2　じっくり見守っている
　　3　だらだら先延ばしにする　　4　ただただ待ち望んでいる

問三　空欄 Ⅰ ～ Ⅲ に入る言葉として最も適当なものを、次の選択肢からそれぞれ選び記号で答えなさい。

1　しかし　　2　あるいは　　3　ただし
4　さらに　　5　それとも

問四　A「その頃の日本人はいまよりはるかに心配性だった」とあるが、それはなぜか、「その頃」の社会状況をふまえて説明しなさい。

問五　B「生き方のダウンサイジングに直面している」とあるが、筆者は「ダウンサイジング」がどのようなことをもたらすと期待しているか、次の文の（　　）に入る適当な内容を、「強迫観念」という言葉を使って、五十五字以内で書きなさい。

「ダウンサイジング」を通して、（　　）ことを期待している。

問六　本文の内容に合致するものを、次の選択肢から二つ選び記号で答えなさい。

1　経済成長という価値観にとらわれた人々は、縮小や減益をおそれる価値観には違和感を覚えがちだ。
2　未来世代につけを回す世代は、未来の人々がすべき公共事業などの需要を不当に先食いしかねない。
3　右肩上がりを経験してきた世代はいま、他国への武力攻撃の可能性を損なわせようと画策している。
4　家訓をかたくなに守った京都の商家は、業域を拡げつつもバブル崩壊の被害からかろうじて免れた。
5　日本の高度成長の好況の影に他国の不幸があるということは、「団塊」の人々の意識にはなかった。

第三問　次の傍線部のカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

1　雑誌に記事がノる。
2　道路がジュウタイする。
3　歴史と伝統をホコる都市。
4　簡単にはダキョウしない。
5　新しいスイハン器を買う。
6　麓まで歩いてゆく。
7　この作品は時代を超えた不朽の名作だ。
8　進捗の状況を問い合わせる。
9　人前で口汚く罵ることはよくない。
10　大雨で流木が河口に堆積する。

第四問　次の各問いに答えなさい。

問一　次の(1)、(2)の傍線部の動詞の活用の種類と活用形の組み合わせとして正しいものを、後の1～4からそれぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。

(1)　隣町の学校へは電車で行けます。

(2)　練習の成果が出てほとんど負けなくなった。

（活用の種類）　・　（活用形）

1　五段活用　・　未然形
2　五段活用　・　連用形
3　下一段活用　・　未然形
4　下一段活用　・　連用形

問二　次の(1)、(2)の傍線部と文法的に同じものを、後の1～4からそれぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。

(1)　問題の解決は困難である。

1　今日は水曜日である。
2　山本さんは元気で明るい。
3　町の広場で縁日が開かれる。
4　雨になりそうである。

(2)　関西には行ったこともない。

1　なにげない言葉が感動を与える。
2　どんな意味かがわからない。
3　ここから駅まではあまり遠くない。
4　やはりない袖は振られぬ。

問三　次の傍線部1～4のうち、他と品詞の異なるものを一つ選び記号で答えなさい。

あの人は[1]むしろ[2]天才であり、[3]いわゆる詩人というよりは、[4]大きな子供だ。

第五問 次の漢文とそれに対する「陽太」と「美月」の会話を読んで、後の問いに答えなさい。

車胤囊蛍読書、孫康映雪読書。一日、康往拝胤、不遇、問何往。門者曰、「出外捉蛍火虫去了。」已而胤答拝康。見康閑立庭中、問何不読書。康曰、「我看今日這天不像箇下雪的。」

車胤は蛍を囊（袋に入れて）して書を読み、孫康は雪に映して書を読む。一日、康の往きて胤を拝（訪ねていこうとすると）さんとするも、遇はざれば、何くにか往くと問ふ。門者（門番）曰はく、「外に出でて蛍光虫を（蛍を）捉へ去り了んぬ。」と。已にして胤康を答拝（お返しに訪ねる）す。康の庭中とりに出かけております）に閑立（ぼんやり立っている）するを見、何ぞ書を読まざると問ふ。康曰はく、「我今日這（この空模様）の天は箇の雪下るに像（様子はないだろう）ざる的と看る。」と。

（「笑府」による）

陽太…この話は、故事成語の「蛍雪の功」をもとに作られた話なんだって。

美月…辞書によれば「蛍雪の功」は、貧しくて明かりの油を買えなかった人が、蛍の光や雪の明かりで勉強したという話から、〝苦労しながら勉強して、それが報われること〟という意味だよ。

陽太…でも、この話はちょっと変だね。【　A　】がいなかったので、いったいどこへ行ったのかと、【　B　】は門番に問うている。結局勉強をしていないところを見ると、どうしてしまったのかな、って思うよね。

美月…それは孫康も同じ。孫康は、本が読めないのは、【　C　】からだ、と考えているようだね。

陽太…この話は、故事成語をもとにしながら、【　D　】がおもしろいんだね。

問一 傍線部が「遇はざれば、何くにか往くと問ふ」という読みになるように、返り点をつけなさい。（ただし、送り仮名はつけないこと）

問二 空欄【　A　】、【　B　】に入れるのに適当な語を本文中から探し、それぞれ漢字二字で抜き出して書きなさい。

問三 空欄【　C　】に入る言葉を考えて、簡潔に書きなさい。

問四 空欄【　D　】に入る言葉として最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

1　二人の意外な才能を見いだしている点
2　二人のすばらしさをおおげさに描いている点
3　二人それぞれに相手の行動をまねさせている点
4　二人を融通のきかない人物にしている点

B日程

二〇二〇年度　尚絅学院高等学校　入学試験問題

解答用紙〔国語〕

＊の欄には記入しないこと。
句読点、記号は全て一字に数えること。

受験番号
得点
＊

第一問　＊

問一

問二

問三

問四

問五 (1)

(2)

問六

第二問　＊

問一

問二 Y

Z

問三 Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問四

問五

「ダウンサイジング」を通して、

ことを期待している。

問六

第三問　＊

※楷書で大きく丁寧に書くこと。

1 ノ る

2 ジュウタイ

3 ホコ る

4 ダキョウ

5 スイハン

6 麓

7 不朽

8 進捗

9 罵 る

10 堆積

第四問　＊

問一 (1)

(2)

問二 (1)

(2)

問三

第五問　＊

問一

不遇、問何往

問二 A

B

問三

問四

【二〇二〇年度入学試験解答B日程／国語】

第一問　30　点

問1　2　4点

問2　4　4点

問3　3　4点

問4　3　4点

問5　(1)　②　4点

(2)　例　町中のなまなましい活動が五感を刺激するが、見えるのは無機質な景色で、この世が自分に関係のない気がして妙に安心できるから。（60　字）　6点

《採点基準》

・「町中のなまなましい活動が五感を刺激する」

・「無機質な〔意味のない・生命のない〕景色である」

・「この世が自分に関係のない気がする」

・「妙に安心できる〔乾いている・砂のような感触・さらさらしている〕」

という内容を書いている。

・「五感」という言葉を使っている。

・理由を表す文末「……から。」「……ので。」などで書いている。

問6　4　4点

第二問　30　点

問1　未来世代（4字）　4点

問2　Y　2　Z　3　各2点×2

問3　Ⅰ　4　Ⅱ　1　Ⅲ　2　各2点×3

問4　例　低収入の定常社会では、大災害や戦乱が起これば食べてゆけなくなるから。

6点

《採点基準》

・「低収入の定常社会」

・「大災害や戦乱が起これば食べてゆけなくなる」

という内容を書いている。

・理由を表す文末「……から。」「……ので。」などで書いている。

問5　例　「右肩上がり」の世代が、「右肩上がり」を知らない世代に感覚的に合流し、「成長」という強迫観念から解放される（53　字）　6点

《採点基準》

・「「右肩上がり」の世代が、「右肩上がり」を知らない世代に感覚的に合流する」

・「「成長」という強迫観念から解放される」

という内容を書いている。

・「強迫観念」という言葉を使っている。

・（　　）に当てはまる形で書いている。

問6　2・5　各4点×2

第三問　20　点　各2点×10

1　載（る）　2　渋滞　3　誇（る）　4　妥協　5　炊飯

6　ふもと　7　ふきゅう　8　しんちょく　9　ののし（る）　10　たいせき

第四問　10　点　各2点×5

問1　(1)　4　(2)　3

問2　(1)　2　(2)　4

問3　2

第五問　10　点　問1・問2各2点×2　問3・問4各3点×2

問1　不レ遇、問二何往一　〔完答〕

問2　A　車胤　B　孫康　〔完答〕

問3　例　雪が降らない

問4　4